

魚玄機

森鷗外

青空文庫

魚玄機ぎょげんきが人を殺して獄に下った。風説たちまは忽ち長安人士の間に流伝せられて、一人とし

て事の意表に出でたのに驚かぬものはなかった。

唐とうの代には道教が盛であつた。それは道士等どうしらが王室の李姓りであるのを奇貨として、老子を先祖だと言い倣なし、老君に仕うることを宗廟そうびように仕うるが如くならしめたためである。

天宝以来西の京の長安には太清宮たいせいきゆうがあり、東の京の洛陽らくようには太微宮たいびきゆうがあつた。その外都会ほかごとに紫極宮しきよくきゆうがあつて、どこでも日を定めて厳かな祭が行われるのであつた。

長安には太清宮しよの下に許多の樓觀いくたがある。道教に觀があるのは、仏教に寺があるのと同じ事で、寺には僧侶そうりよが居おり、觀には道士が居る。その觀の一つを咸宜觀かんぎかんと云つて女道士じようどうし魚玄機はそこに住んでいたのである。

玄機は久しく美人を以て聞えていた。趙瘦ちようそうと云わむよりは、むしろ楊肥ようひと云うべき

女である。それが女道士になつてゐるから、脂粉の顔色けがをすを嫌つていたかと云うと、そうではない。平生粧よそおいを凝こし容かたちを冶かざつていたのである。獄に下つた時は懿宗いそうの咸通九年かんつうで、玄機は恰あたも二十六歳になつてゐた。

玄機が長安人士の間に知られてゐたのは、独り美人として知られてゐたのみではない。

この女は詩を善くした。詩が唐の代に最も隆盛であつたことは言を待たない。隴西の李白、襄陽の杜甫が出て、天下の能事を尽した後に太原の白居易が踵いで起つて、古今の人情を曲尽し、長恨歌や琵琶行は戸ごとに誦んぜられた。白居易の亡くなつた宣宗の大中元年に、玄機はまだ五歳の女児であつたが、ひどく伶俐で、白居易は勿論、それと名を齊ゆうしていた元微之の詩をも、多く暗記して、その数は古今体を通じて数十篇に及んでいた。十三歳の時玄機は始めて七言絶句を作つた。それから十五歳の時には、もう魚家の少女の詩と云うものが好事者の間に写し伝えられることがあつたのである。

そう云う美しい女詩人が人を殺して獄に下つたのだから、当時世間の視聴を聳動したのも無理はない。

魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がつて行く小さい街にあつた。所謂狭邪の地でどの家にも歌女を養つてゐる。魚家もその倡家の一つである。玄機が詩を学

びたいと言ひ出した時、両親が快く諾して、隣街の窮措大きゆうそだいを家に招いて、平仄ひようそくや押韻の法を教えさせたのは、他日この子を揺金樹ようきんじゆにしようと云う願があつたからである。

大中十一年の春であつた。魚家の妓数人ぎずが度々ある旗亭きていから呼ばれた。客は宰相さいしやう令狐れいこ絢うの家の公子で令狐れいこかく※と云う人である。貴公子仲間の斐誠ひせいがいつも一しよに来る。それに今一人の相伴があつて、この人は温姓おんせいで、令狐や斐に鍾馗しやうき々と呼ばれている。公子二人は美服しているのに、温は独り汚れ垢あかついた衣きぬを着ていて、兎角公子等に頗使いしせられるので、妓等は初め僮僕どうぼくではないかと思つた。然るに酒酣しかなわに耳熱して来ると、温鍾馗は二公子を白眼に視て、叱咤怒号しったする。それから妓に琴を弾かせ、笛を吹かせて歌い出す。かつて聞いたことのない、美しい詞ことばを朗かな声で歌うのに、その音調が好く整つていて、しろう人ととは思われぬ程である。鍾馗の譚名あだなのある于思うさいかんもく 目の温が、二人の白面郎に侮られるのを見て、嘲諷ちやうぎやくの目標にしていた妓等は、この時温の傍そばに一人寄り二人寄つて、とうとう温を囲んで傾聴した。この時から妓等は温と親しくなつた。温は妓の琴を借りて弾いたり、笛を借りて吹いたりする。吹弾すいたんの技も妓等の及ぶ所ではない。

妓等が魚家に帰つて、頻しきりに温の噂うわさをするので、玄機げんきがそれを聞いて師匠ししやうにしている措大に話すと、その男が驚いて云つた。「温鍾馗と云うのは、恐らくは太原の温岐おんきの事だろう。

またの名は庭筠、字は飛卿である。挙場にあつて八たび手を叉げば八韻の詩が成るので、温八又と云う譚名もある。鍾馗と云うのは、容貌が醜怪だから言うのだ。当今の詩人では李商隠を除いて、あの人の右に出るものはない。この二人に段成式を加えて三名家と云っているが、段はやや劣っている」と云った。

それを聞いてからは、妓等が令狐の筵会から帰る毎に、玄機が温の事を問う。妓等もまた温に逢う毎に玄機の事を語るようになった。そしてとうとうある日温が魚家に訪ねて来た。美しい少女が詩を作ると云う話に、好奇心を起したのである。

温と玄機とが対面した。温の目に映じた玄機は将に開かむとする牡丹の花のような少女である。温は貴公子連と遊んではいるが、もう年は四十に達して、鍾馗の名に負かぬ容貌をしている。開成の初に妻を迎えて、家には玄機とほとんど同年になる憲と云う子がいる。玄機は襟を正して恭く温を迎えた。初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした温は、覚えず容を改めた。さて語を交えて見て、温は直に玄機が尋常の女でないことを知った。何故と云うに、この花の如き十五歳の少女には、些の嬌羞の色もなく、その口吻は男子に似ていたからである。

温は云った。「卿の詩を善くすることを聞いた。近業があるなら見せて下さい」と云つ

た。

玄機は答えた。「児は不幸にして未だ良師を得ません。どうして近業の言うに足るものがありましょう。今伯樂の一顧を得て、奔はくらくして千里を致すの思があります。願わくは題を課してお試み下さい」と云ったのである。

温は微笑を禁じ得なかった。この少女が良驥りようきを以て自ら比するのは、いかにもふさわしくないように感じたからである。

玄機は起たつて筆墨を温の前に置いた。温は率然「江辺柳」の三字を書いて示した。玄機が暫しばらく考えて占せんしゅつ出した詩はこうである。

賦得江辺柳

翠色連荒岸。
すゐしよくわうがんにつらなり

烟姿入遠楼。
えんしゑんろうにいる

影鋪秋水面。
かげはしうすゐのおもてにのべ

花落釣人頭。
はなはつりびとのかうべにおつ

根老藏魚窟。
ねはおいてぎよくつかくれ

枝低繫客舟。
えだはひくくきやくしうつながる

蕭々風雨夜。
せうせうたりふううのよ

驚夢復添愁。
ゆめよりさめてまたうれひをそふ

温は一誦しようして善よしと称した。温はこれまで七たび挙場に入った。そして毎つねに堂々たる男子が苦索して一句を成し得ないのを見た。彼輩かのはいは皆遠くこの少女に及ばぬのである。

此を始として温は度々魚家を訪ねた。二人の間には詩筒の往反織るが如くになった。

温は大中元年に、三十歳で太原から出て、始めて進士の試に応じた。自己の詩文は燭一寸を燃さぬうちに成ったので、隣席のものが呻吟するのを見て、これに手を仮して遣った。その後挙場に入る毎に七八人のために詩文を作る。その中には及第するものがある。ただ温のみはいつまでも及第しない。

これに反して場外の名は京師に騒いで、大中四年に宰相になった令狐綯も、温を引見して度々筵席に列せしめた。ある日席上で綯が一の故事を問うた。それは莊子に出ている事であった。温が直ちに答えたのは好いが、その詞は頗る不謹慎であった。「それは南華に出ております。余り僻書ではございません。相公も理の暇には、時々読書をもなさるが宜しゅうございましょう」と云ったのである。

また宣宗が菩薩蛮の詞を愛するので、綯が填詞して上った。実は温に代作させて口止をして置いたのである。然るに温は酔つてその事を人に漏した。その上かつて「中書

堂内坐將軍うないしやうぐんをさせしむ」と云ったことがある。絢が無学なのを譏そしったのである。

温の名は遂ついにに宣宗にも聞えた。それはある時宣宗が一句を得て対を挙人中に求めると、温は宣宗の「金步揺きんほよう」に対するに「玉条脱ぎよくじようだつ」を以てして、帝に激賞せられたのである。然るに宣宗は微行をする癖があつて、温の名を識しつてから間もなく、旗亭で温に邂逅いこうした。温は帝の顔を識しらぬので、暫く語を交えているうちに傲慢無礼ごうまんの言をなした。既にして挙場では、沈詢ちんじゆんが知挙になつてから、温を別席に居らせて、隣に空席を置くことになつた。詩名はいよいよ高く、帝も宰相もその才を愛しながら、その人を鄙いやしんだ。趙顓ちようせんの妻になつている温の姉などは、弟のために要路に懇請したが、何の甲斐かいもなかつた。

温の友に李億りおくと云う素封家があつた。年は温より十ばかりも少くて頗すこぶる詞賦しふを解していた。

咸通元年かんつうの春であつた。久しく襄陽じやうように往つていた温が長安かえに還つたので、李がそ

の寓居を訪ねた。襄陽では、温は刺史徐商の下で小吏になって、やや久しく勤めていたが、終に厭倦を生じて罷めたのである。

温の机の上に玄機の詩稿があつた。李はそれを見て歎称した。そしてどんな女かと云つた。温は三年前から詩を教えている、花の如き少女だと告げた。それを聞くと、李は精しく魚家のある街を問うて、何か思うことありげに、急いで座を起つた。

李は温の所を辞して、徑ちに魚家に往つて、玄機を納れて側室にしようと云つた。玄機の両親は幣の厚いのに動された。

玄機は出て李と相見た。今年はまだ十八歳になっている。その容貌の美しさは、温の初て逢つた時の比ではない。李もまた白晢の美丈夫である。李は切に請い、玄機は必ずしも拒まぬので、約束は即時に成就して、数日の後に、李は玄機を城外の林亭に迎え入れた。

この時李は遽に発した願が遽に慚つたように思つた。しかしそこに意外の障礙が生じた。それは李が身を以て、近こうとすれば、玄機は回避して、強いて逼れば号泣するのである。林亭は李が夕に望を懷いて往き、朝に興を失つて還るの処となつた。

李は玄機が不具ではないかと疑つて見た。しかしもしそうなら、初に聘を卻けたはずで

ある。李は玄機に嫌われているとも思うことが出来ない。玄機は泣く時に、一いっ旦たん避けた身を李に靠もたせ掛けてさも苦痛に堪えぬらしく泣くのである。

李はしばしば催してかつて遂げぬ欲望のために、徒らに精神を銷磨しょうまして、行住座臥こうじゅうざがの間、恍惚こうこつとして失する所あるが如くになった。

李には妻がある。妻は夫の動作が常に異なるのを見て、その去住に意を注いだ。そして僮僕どうぼくに啗くわしめて、玄機の林亭にいることを知った。夫妻は反目した。ある日岳父が媚むこの家に来て李を面責し、李は遂に玄機を逐おうことを誓った。

李は林亭に往つて、玄機に魚家に帰ることを勧めた。しかし魚は聴かなかつた。縦令たといふ二親たおやは寛仮するにしても、女伴じよはんの侮あなごりを受けるに堪えないと云うのである。そこで李は兼かねて交つていた道士趙鍊師ちようれんしを請待しょうだいして、玄機の身の上を託した。玄機が咸宜觀に入つて女道士になったのは、こうした因縁である。

玄機は才智に長けた女であつた。その詩には人に優れた剪裁せんさいの工たくみがあつた。温を師と

して詩を学ぶことになつてからは、一面には典籍の涉獵に努力し、一面には字句の錘鍊つうれんに苦心して、ほとんど寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が漸く増長ようやした。

李に聘せられる前の事である。ある日玄機は崇真觀しゅうしんかんに往つて、南樓に狀元じようげん以下の進士等が名を題したのを見て、慨然として詩を賦ふした。

遊崇真觀南樓しゅうしんくわんのなんろうにあそび。觀新及第題名處しんきふだいのなをだいせしところをみる。

雲峯滿目放春晴うんほうまんもくしゆんせいはなち。歷々銀鈎指下生れきれきたるぎんこうかせいをさす。

自恨羅衣掩詩句みづからうちむらいのしきをおほふを。拳頭空羨榜中名かうべをあげてむなくばうちゆうのなをうらやむ。

玄機が女子の形骸けいがいを以て、男子の心情を有していたことは、この詩を見ても推知することが出来る。しかしその形骸が女子であるから、吉士きつしを懷おもうの情がないことはない。ただそれは蔓草つるくさが木の幹に纏まとい附こうとするような心であつて、房帷ぼういの欲ではない。玄機は彼があつたから、李の聘に応じたのである。此これがなかつたから、林亭の夜は索莫さくばくであつたのである。

既にして玄機は咸宜觀に入つた。李が別に臨んで、衣食に窮せぬだけの財を餽おくつたので、玄機は安んじて觀内で暮らすことが出来た。趙が道書を授けると、玄機は喜んでこれを読

んだ。この女のためには経けいを講じ史を読むのは、家常の茶飯であるから、道家の言が却かえつてその新を趁おい奇を求める心を悦よろこばしめたのである。

当時道家には中氣真術と云うものを行う習ならいがあつた。毎月朔望さくぼうの二度、予め三日の齋ものいみをして、所謂いわゆる四目四鼻孔うんぬん云々の法を修するのである。玄機はるべからざる規律もとの下にこれを修すること一年余にして忽然こつぜん悟入する所があつた。玄機は真に女子になつて、李の林亭にいた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年の春の事である。

玄機は共に修行する女道士中のやや文字ある一人と親しくなつて、これと寢食を同じゆうし、これに心胸を披瀝ひれきした。この女は名を采蘋さいひんと云つた。ある日玄機が采蘋に書いて遣やつた詩がある。

贈隣女りんぢよにおくる

ひをさけてらしうもてさへぎる
羞日遮羅袖。
もとめやすきはあたひなきたから
易求無価宝。

はるをうれひてきしやうするにものうし
愁春懶起粧。
えがたきはこころあるらう
難得有心郎。

枕上ちんじやうひそかになみだをながし。
 涙。

みづからよくそうぎよくをうかぐふ。

自能窺宋玉。

花間くわかんひそかにはらわたをたつ。
 暗断腸。

なんぞかならずしもわうしやうをうらまん
 何必恨王昌。

采蘋は体が小く、軽率であつた。それに年が十六で、もう十九になつてゐる玄機よりは
 少いので、始終沈重ちんちような玄機に制馭せいぎよせられていた。そして二人で争うと、いつも采蘋
 が負けて泣いた。そう云う事は日毎にあつた。しかし二人は直ただちにまた和睦わぼくする。女道士仲
 間では、こう云う風に親しくするのを対食と名づけて、傍かたわらから揶揄やゆする。それには羨せんと妬
 とも交まじつてゐるのである。

秋になつて采蘋は忽失踪たちまちつそうした。それは趙の所で塑像を造つてゐた旅の工人が、暇いとまを告
 げて去つたのと同時であつた。前に対食を嘲あざけつた女等が、趙に玄機の寂しがつてゐること
 を話すと、趙は笑つて「蘋也飄蕩ひんやへうたう、蕙也幽独けいやいうどく」と云つた。玄機は字を幼稚あざなと云い、ま
 た蕙蘭けいらんとも云つたからである。

趙は修法の時に規律を以て束縛するばかりで、楼観の出入などを厳にすることはなかつ

た。玄機の所へは、詩名が次第に高くなつたために、書を索めに来る人が多かつた。そう云う人は玄機に金を遣ることもある。物を遣ることもある。中には玄機の美しいことを聞いて、名を索書に藉りて訪うものもある。ある士人は酒を携えて来て玄機に飲ませようとする、玄機は僮僕を呼んで、その人を門外に逐い出させたそうである。

然るに采蘋が失踪した後、玄機の態度は一変して、やや文字を識る士人が来て詩を乞い書を求めると、それを留めて茶を供し、笑語を移すことがある。一たび歎待せられたものは、友を誘つて再び来る。玄機が客を好むと云う風聞は、幾もなくして長安人士の間に伝わった。もう酒を載せて尋ねても、逐われる虞はなくなつたのである。

これに反して徒に美人の名に誘われて、目に丁字なしと云う輩が来ると、玄機は毫も仮借せずに、これに侮辱を加えて逐い出してしまふ。熟客と共に来た無学の貴介子弟などは、幸にして謾罵を免れることが出来ても、坐客があるいは句を聯ねあるいは曲を度する間にあつて、自ら視て欠然たる処から、独り竊に席を逃れて帰るのである。

客と共に 謔浪ぎやくろうした玄機は、客の散じた後に、怏々おうおうとして楽まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛たえている。そう云う夜旅中の温に寄せる詩を作ったことがある。

寄飛卿ひけいによす

※砌乱蛩鳴かいぜいらんきようなき。

庭柯烟露清ていかえんろきよし。

月げつ中隣樂響ちゅうちゅうりんがくひびき。

楼上遠山明ろうじやうゑんざんあきらかなり。

珍簟涼風到ちんてんにりやうふういたり。

瑤琴寄恨生えうきんにきこんうまる。

君懶書札けいくんしよさつにもものうし。

底物慰秋情なにごとぞしうじやうをなぐさめん。

玄機は詩筒を発した後、日夜温の書の来るのを待った。さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したように見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。

ある夜玄機は例の如く、燈の下に眉を蹙ひそめて沈思していたが、漸ようやく不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、また直すぐに放下しなどしていた。やや久しゅうして後、玄機は紙を展のべて詩を書いた。それは楽人陳某ちんぼうに寄せる詩であつた。陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共にただ一度玄機の所に来たのである。体格が雄偉で、面貌めんぼうの柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視して

いた。年は玄機より少いのである。

感懷寄人

うらみをしゆげんのうへによせ
恨寄朱絃上。

じやうをふくめどもいまかせず
含情意不任。

はやくもしるうんうのくわいするを
早知雲雨会。

いまだおこさずけいらんのこころ
未起蕙蘭心。

しやくくたるもくとすも、
灼々桃兼李。

こくしのたづぬるをさまたぐるなし
無妨国士尋。

さうくたるまつとかつら
蒼々松与桂。

なほうらやむよのひとのあふぐを
仍羨世人欽。

げつしよくていかいにきよく
月色庭階淨。

かせいちくあんにつかし
歌声竹院深。

もんぜんこうえふのち
門前紅葉地。

はらはすちいんをまつ
不掃待知音。

陳は翌日詩を得て、直に咸宜觀に來た。玄機は人を屏けて引見し、僮僕に客を謝するこ

とを命じた。玄機の書齋からはただ微かに低語の聲が聞えるのみであつた。初夜を過ぎて

陳は辞し去つた。これからは陳は姓名を通ぜずに玄機の書齋に入ることになり、玄機は陳

を迎える度に客を謝することになった。

陳の玄機を訪うことが頻なので、客は多く卻けられるようになった。書を索めるものは、ただ金を贈つて書を得るだけで、満足しなくてはならぬことになったのである。

一月ばかり後に、玄機は僮僕いとまに暇を遣つて、老婢一人を使うことにした。この醜惡な、いつも不機嫌な媼おうなはほとんど人に物を言うこともないので、観内の状況は世間に知られることが少く、玄機と陳とは余り人に煩聒はんかつせられずにいることが出来た。

陳は時々旅行することがある。玄機はそう云う時にも客を迎えずに、籠居ろうきよして多く詩を作り、それを温に送つて政を乞うた。温はこの詩を受けて読む毎に、語中に閨人けいじんの柔情ゆうじょうが漸く多く、道家の逸思がほとんど無いのを見て、訝しげに首を傾けた。玄機が李の妾しやうになつて、幾もなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道士になつた顛末てんまつは、悉く李の口から温の耳に入つていたのである。

七年程の月日が無事に立つた。その時夢にも想わぬ災害が玄機の身の上につつて来た。咸通八年の暮に、陳が旅行をした。玄機は跡に残つて寂しく時を送つた。その頃温このころに寄せた詩の中に、「満庭木葉愁風起、透幌紗窓惜月沈」と云う、例に無い悽慘せいさんな句がある。

九年の初春に、まだ陳が歸らぬうちに、老婢が死んだ。親戚しんせきの恃たのむべきものもない嫗りよくぎは、兼かねて棺材まで準備していたので、玄機は送葬の事を計らうて遣った。その跡へ緑翹りよくぎと云う十八歳の婢が来た。顔は美しくはないが、聰慧そうけいで媚態びたいがあつた。

陳が長安に歸つて咸宜觀に來たのは、艷陽三月の天であつた。玄機がこれを迎える情は、渴した人が泉に臨むようであつた。暫らくは陳がほとんど虚日のないように來た。その間に玄機は、度々陳が緑翹を揶揄やゆするのを見た。しかし玄機は初め意に介せなかつた。なぜと云うに、玄機の目中には女子としての緑翹はないと云つて好位よであつたからである。

玄機は今年二十六歳になつてゐる。眉目端正な顔が、迫り視みるべからざる程の氣高い美しさを具えて、新あらたに浴を出た時には、琥珀色の光を放つてゐる。豊かな肌は瑕きずのない玉のようである。緑翹は額の低い、頤おとがの短い子に似た顔で、手足は粗大である。領えりや肘はいつも垢膩こうじに汚けがれてゐる。玄機に緑翹を忌む心のなかつたのは無理もない。

そのうち三人の關係が少しく紛糾して來た。これまでは玄機の挙措が意に満たぬ時、陳は寡言になつたり、または全く口を噤つぶんでいたりに、今は陳がそう云う時、多く緑翹と語つた。その上そう云う時の陳の詞ことばは極きわて温和である。玄機はそれを聞く度に胸を刺されるように感じた。

ある日玄機は女道士仲間に招かれて、某の樓觀に往った。書齋を出る時、綠翹にその觀の名を教えて置いたのである。さて夕方になつて歸ると、綠翹が門に出迎えて云つた。

「お留守に陳さんがお出なさいました。お出になつた先を申しましたら、そうかと云つてお歸なさいました」と云つた。

玄機は色を変じた。これまで留守の間に陳の來たことは度々あるが、いつも陳は書齋に入つて待つていた。それに今日は程近い所にいるのを知つていて、待たずに歸つたと云う。玄機は陳と綠翹との間に何等かの秘密があるらしく感じたのである。

玄機は黙つて書齋に入つて、暫く坐して沈思していた。猜疑は次第に深くなり、忿恨は次第に盛んになつた。門に迎えた綠翹の顔に、常に無い侮蔑の色が見えたようにも思われて来る。温言を以て綠翹を賺す陳の聲が歴々として耳に響くようにも思われて来る。

そこへ綠翹が燈に火を点じて持つて來た。何気なく見える女の顔を、玄機は甚だしく陰險なように看取した。玄機は突然起つて扉に鎖を下した。そして震う声で詰問しはじめた。女はただ「存じません、存じません」と云つた。玄機にはそれが甚しく狡猾なように感ぜられた。玄機は床の上に跪いている女を押し倒した。女は懼れて目を睜っている。「なぜ白状しないか」と叫んで玄機は女の吭を扼した。女はただ手足をもがいている。玄機が

手を放して見ると、女は死んでいた。

玄機の緑翹を殺したことは、やや久しく発覚せずにいた。殺した翌日陳の来た時には、玄機は陳が緑翹の事を問うだろうと予期していた。しかし陳は問わなかった。玄機がとうとう「あの緑翹がゆうべからいなくなりましたが」と云って陳の顔色を覗^{うかが}うと、陳は「そうかい」と云っただけで、別に意に介せぬらしく見えた。玄機は前夜のうちに観^{うしろ}の背後に土を取った穴のある処へ、緑翹の屍^{かばね}を抱いて往つて、穴の中へ推し墜^{おと}して、上から土を掛けて置いたのである。

玄機は「生ける秘密」のために、数年前から客を謝していた。然るに今は「死せる秘密」のために懼^{おそれ}を懷^{いだ}いて、もし客を謝したら、緑翹の踪^{そう}跡^{せき}を尋ねるものがあるが、観^{うしろ}内に目を著^つけはすまいかと思つた。そこで切^{せつ}に会見を求めるものがあると、強いて拒まぬことにした。

初夏の頃に、ある日二三人の客があつた。その中の一人が涼を求めて観^{うしろ}の背後に出ると、土を取った跡らしい穴の底に新しい土が填^うまつていて、その上に緑色に光る蠅^{はえ}が群がり集

まっていた。その人はただなんとなく訝しく思つて、深い思慮をも費さずに、これを自己の従者に語った。従者はまたこれを兄に語った。兄は府の衛卒を勤めているものである。この卒は数年前に、陳が払曉に咸宜觀から出るのを認めたことがある。そこで奇貨措くべしとなして、玄機を脅して金を獲ようとしたが、玄機は笑つて顧みなかった。卒はそれから玄機を怨んでいた。今弟の語を聞いて、小婢の失踪したのと、土穴に腥羶の氣があるのとの間に、何等かの関係があるように思つた。そして同班の卒数人と共に、を待つて咸宜觀に突入して、穴の底を掘つた。緑翹の屍は一尺に足らぬ土の下に埋まっていたのである。

京兆の尹温璋は衛卒の訴に本づいて魚玄機を逮捕させた。玄機は毫も弁疏することなくして罪に服した。樂人陳某は鞫問を受けたが、情を知らざるものとして釈された。

李億を始として、かつて玄機を識つていた朝野の人士は、皆その才を惜んで救おうとした。ただ温岐一人は方城の吏になつて、遠く京師を離れていたので、玄機がために力を致すことが出来なかつた。

京兆の尹は、事が余りにあらわになつたので、法を枉げることが出来なくなつた。立秋

の頃に至つて、遂に懿宗に上奏して、玄機を斬に処した。

玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にいる温岐であつた。

玄機が刑せられる二年前に、温は流離して揚州に往つていた。揚州は大中十三年に宰相を罷めた令狐綯が刺史になつてゐる地である。温は綯が自己を知つていながら用いながつたのを怨んで名刺をも出さずにいるうちに、ある夜妓院に酔つて虞候に撃たれ、面に創を負い前歯を折られたので、怒つてこれを訴えた。綯が温と虞候とを対決させると、虞候は盛んに温の汗行を陳述して、自己は無罪と判決せられた。事は京師に聞えた。温は自ら長安に入つて、要路に上書して分疏した。この時徐商と楊収とが宰相に列してゐて、徐は温を庇護したが楊が聴かずに、温を方城に遣つて吏務に服せしめたのである。その制辞は「孔門以德行為先、文章為末、爾既德行無取、文章何ぞもつてしようせられんや、徒負不羈之才、罕有適時之用」と云うのであつた。

温は後に隋^{ずい}県^{けん}に遷^{うつ}されて死んだ。子の憲も弟の庭皓^{ていこう}も、咸通中に官に擢^{ぬきん}でられたが、庭皓は龐^{ほう}勛^{くん}の乱に、徐州で殺された。玄機が斬られてから三月の後の事である。

参照

其一 魚玄機

三水小牘

南部新書

太平広記

ほくむさげん
北夢瑣言

続談助

唐才子伝

唐詩紀事

全唐詩（姓名下小伝）

全唐詩話

唐女郎魚玄機詩

其二 温飛卿

旧唐書

ぎょいんそうわ
漁隱叢話

新唐書

北夢瑣言

全唐詩話

どうしん
桐薪

唐詩紀事

玉泉子

六一詩話

南部新書

滄浪詩話

彦周詩話

三山老人語錄

雪浪齋日記

握蘭集

金筌集

漢南真稿

溫飛卿詩集

(大正四年四月)

青空文庫情報

底本：「森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

入力：清角克由

校正：ちはる

2001年3月6日公開

2006年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚玄機

森鷗外

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>